
魔王の花嫁

諒夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の花嫁

【Nコード】

N6156C

【作者名】

諒夏

【あらすじ】

4歳の誕生日に突然現れた青年。その者は自分を花嫁と呼んだ。そして父を…母を殺された少女、悠里は恐怖を伴い、彼に連れて行かれる。泣きはらす悠里に待ち受けるものは……？

連れ去られた少女（前書き）

4歳の誕生に起こった異変。

それに小さな悠里はどう立ち向かっていくのか…

そしてこれからどうなるの？

連れ去られた少女

『来い！！我が花嫁^{おんな}』

彼は静かにそう呟き、幼い子の手を取った。

彼はただ静かに何の前触れもなくその子の前に現れ、その子供にそう呟いたのだ。

そして、その子供の父親と母親が彼を止めようと近づくと、

『邪魔をするなっ！！』

そう言っただけで、手を振り上げただけだった。

たったそれだけなのに…

「父様：母様…」

子供の前に倒れた父親と母親に近づく事をその男は許さず、子供を米俵を担ぐがごとく担ぎ、そのまま外へと連れ出した。

倒れた二人の体はよもや人とはいえぬ、物体。

鮮血で汚れた床、汚された家…

それはとても衝撃的な日だった。

その子供の名は白井悠里。

今日は悠里の誕生日だった。

4歳になる娘の誕生日を祝おうと早く帰ってきた父親と
いつも以上に楽しそうな母親の顔を見るのが凄く好きだった。

なのに…今悠里を担ぎ上げている男はただ一言、面白くなさそうに笑った。

「フンッ！」

行くぞ。

庭に出た彼は何もない空間に空いた穴へと姿を消した。

その見知らぬものに恐怖を抱き、悠里は声を発する事が出来なかった。

その後どのくらい時間がたっただろうか…

彼が悠里を下ろしたのは…

「ここが今日からお前の部屋だ。好きにしろ」

そういわれて初めて感じる床の感触。

畳の部屋であることは分かった。

そして差し込む光りが月明かりである事も…

彼はそう言っただけきり声が聞こえないと想ったらもうそこにはいなかった。

悠里は初めて窓が開け放たれている事に気づき、庭に通じる縁側まで歩いていった。

見えたのは自分がいた家とは違う庭の様子。

和風な感じにまとめられ、白い砂が敷き詰められている庭。

状況を判断するにはまだ幼すぎるため、何が起ったのか理解すら出来ずに縮こまっていた。

ただ、分かっているのは父親と母親はもういないという事だけ…自分の四歳の誕生日に誰も祝ってくれる人がいないという事。

自然と涙が溢れ、悠里は庭へと足を下ろした。
月の光りは優しく、まるで悠里を包むかのように光が差し込む。
それにつられて涙が溢れる。

だが、ここで泣いてしまう事に恐怖を感じた。
どつかであの男が見ているかもしれない。

もしかしたら自分も父や母のように殺されるかもしれないという恐怖感が声を殺させていた。

“ 父様：母様：”

心で叫び、涙を流す悠里。

ただ静かに、そこに蹲り、涙を流し続けていた。

一方彼はというと悠里とは正反対に大いに満足していた。
悠里が生まれて早4年。

ずっとこのときを待っていたのだ。

誰にも邪魔などさせるはずはない。

「紅様：やけにご機嫌くれないね」

どうしたの？

「何でも、望んだモノがようやく手中に収まったとか
聞いたけど・・・？」

「そりやめでたい」

あの人の機嫌が悪いとこつちにも被害が出るからね。
それを防げるならそれに越した事はないってもんよ。
使女の言葉にも耳を傾ける余裕すらない。

「でも、あの方の望んでいたモノって？」

「……さあ？」

使女たちもそこまでは分からない。

だが、主である紅が良いなら良いのだと解釈した。

「…すう……」

ひとしきり泣いた悠里は庭近くの縁側に寄りかかって眠っていた。

その悠里は今、少年にだっこされて部屋へと戻されていた。

「よいしょと」

きちんと悠里が眠れるように布団を敷き、横たわせ、掛け布団をかける少年はにこりと微笑んだ。

小さな寝息にほっとした少年はそのまままた庭の方に歩き出した。

そして、眠っている悠里に呟く。

「おやすみ、お妃様」

彼の名前はウイル。

使い魔の一人であった。

そう、彼は知っていたのだ、自らの主の妃であるということ。

連れ去られた少女（後書き）

悠里に起こった異変。

さあ、どうなる！？

ウィルって何者？

翌日（前書き）

目を覚ました悠里が観たのは綺麗な女の人。
その人は悠里の使女だった

翌日

紅が部屋を訪れた時には誰かが寝かし付けたあとだった。

ふとんにくるまって眠る彼女の額にかかる髪を結く。

幼いが産まれたときから欲しかった花嫁。

どうしても我慢出来なくて無理矢理奪い取った。

彼女を・・・

「ふっ、幼いな」

髪を結く紅の手は優しく、彼の目は優しい。

「幼いとしても手放す気などさらさらないが・・・」

見つめる視線は愛しく、熱い。

その頬に手を滑らせる。

想起こそせば、悠里が生まれ、まだ4年しか経っていない。
幼いにもほどがあるのだが…

永く生きている紅からすれば4年も待ったのだ。

「そなたは我が妃。誰にも譲るつもりはない。」
覚悟しておくのだな。

それが悠里自身であつても渡さない…

紅は自分自身に語りかけるかのようにそう呟いた。

「んうっ？」

小さく声が漏れたが起きる気配はない。

その事に安堵してる自分がいて、紅は目を細める。
はだけた布団を掛け直し、紅はその場を後にした。

自分が望めば沢山のものが手に入る。
そんな生活の中で唯一手に入らなかった存在。

だから余計に欲しくなる。

彼女の様な存在が。

> 思い通りになるものなんて飽きた。 <

だから思い通りにならないもの、自らと対等でいたいと思うものが
欲しい。

紅は本気でそう思っていた

「悠里…」

幼き我が妃。

< 我がモノとなれ…

我と同等の権力、力、すべてをそなたに与えよう。

だから、我が願いを叶えよ。

そなた自身を我に…

与えたまえ。 >

紅は悠里を寝かせている部屋の正面にある窓から手を伸ばし、宙へ向かって手を伸ばした。

彼にとって悠里は月のようなもの。

地上から手を伸ばしても手に入れられない月の君。

だから奪ったのだと。

彼は近づくための障害を。

地上と月を別つ空を断ち切り、月を強引に手にいれた。

「この城からは出られぬ…」

いや、出さぬ。

時間はたつぷりとあるのだから…

ゆっくり我がモノとしよう。

諦めるがいい、悠里。

紅は踵を翻し、部屋を後にした。

その紅を後ろから追いかけるモノがいた。

『いつそ操つたらいいのに？』

「…貴様が」

柄に掛けていた手はずし、そのまま歩き続けた。

少年は不思議そうに紅を見ていた。

『だって、簡単じゃん。』

魔王様ならそんな朝飯前でしょ？

なあって操らないの？

彼はキヤル。魔王である紅の使い魔の一人である。

ウィルと同じ魂を持つ双子の片割れである。

だがウィルとは違い、キヤルは正直。

自らの欲に忠実、それと違い、ウィルはどっちかといえば考えてから物事を行う。

正反対の二人を紅は側近として使っていた。

だが、そんなキヤルも外見や性格とは裏腹にその戦いぶりは魔界に
いる5人の将に匹敵するほどの腕前。

物事がはつきり白黒ついているキヤルは軍内を乱すこともしばしば
あるが、その後始末もやってしまうため、乱したこと自体がうやむ
やにされる事もある。

「アレに手を出すなよ」

アレは…我がモノぞ。

『出さないって。』

でも、なんかつまらないなあ〜。

紅はため息をついた。

『だあ〜って、操った方が簡単だし、絶望に追い込まれたやつほど
記憶操作だって簡単…』

キヤルが口をつぐんだ。

これ以上は紅の機嫌を損ねてしまうとわかったから。

でもそれ以上に待ってるだけの紅をおかしいとも想ってしまう。

キヤルの知っている紅は即決即断だったし、人間に関しては魔界の
ものは負の気を好むから絶望に追い込む方法をいくつも知ってるの
も当然。

その能力が抜き出ている紅だからキヤルは傍にいるのだ。

いつも面白い事を沢山してくれて、負の気も沢山纏ってる紅。

だけど今回の事は勝手が違うのか面白くない。
そうキヤルは言っている。

「年若いモノにそれはムリだろう…」

ましてあのモノは契約を交わし、我がモノとなった。これからゆっくりにしていく。

何も焦る事はあるまい。

『ふう〜ん、でもさあ、ボクはつまないから勝手にしていい?』

「…アイツ以外ならかまわん」

好きにしろ。

『うわあ〜い』

うれしそうに掛けていくキヤルに廊下を歩いてきたウィルがきょとんとして立ちすくんでいた。

『…よろしいので?』

心配そうなウィルの横で紅は笑う。

「ああ、そうだな、ウィルお前も行け」

あやつ一人では心配だからな…

『御意』

ウィルは頭を垂れ、そのままキヤルの後ろを追っていった。

魔界に朝は来ない。

正確に言うならば朝日などは差さない。

ただ、時間が流れるだけ…

その時間を知るすべは紅が人間界より持ち帰った時計というので流れる時間を知る事が出来る。

明けぬ夜が幾ばくか過ぎ、人間界では朝という時間帯…
もちろん魔界に日など差さないが…

そんな魔界の朝といえる時間帯に悠里の元を尋ねた女人がいた。

『おはようございます』

眠っていた悠里を起こし、そつと上掛けをずらす。

眠っていた悠里はそつと目を覚まし、その女性に驚きを隠せない。

『おはようございます。お目覚めになられましたか？』

「…おはよう」

驚きでそれ以上言葉が出てこなかった。

するとその女性はいつこり笑い…

『今日からお世話をする睡蓮すいれんと申します。』

「…おせわ？」

『はい。』

笑顔の睡蓮に悠里も攣られて自然に笑う。

『具合は悪くありませんか？』

「…？」

『ではお召しかえを…』

「…おめしかえって何？」

召しかえという聴きなれない言葉に首をかしげた。

『着替えしましょうね。』

着替えるという意味ですよ。

「あ…」

そついわれて頷いた。

着替えを済ませるとすぐに朝食が運ばれてきた。

『では、歯磨きできますか？』

お一人で。

睡蓮の言葉に頷いた悠里。

歯磨きを済ませるとすぐに散歩に連れて行かれた。

『まだ悠里様は幼くていらっしゃいますからね』

まずはこちらに慣れていただきたいんです。

そついつて笑う睡蓮に悠里はふと想った疑問を聞いてみた。

「ねえ、あの人は？」

『…どなたのことですか？』

「紅い髪の…」

怖いのだろう…紅のことが。

途切れ途切れになり、瞳が潤む。

『あの方は紅様です』

「…くないさま？」

『まさか、お名前も言われませんでしたか？』

あの方は…

「…（コクツ）」

初めて聴いた。

そう呟く悠里に睡蓮は苦笑いを隠せなかった。

『あの方はこの世界の王様です。紅様とお呼びになった方がよろしいかと』

あなたはあの方の妃、つまり王様と同じ権力を持っていることになります。

困惑したような悠里に一つ一つ解説していった。

どういう意味なのか、ということが今悠里に必要なのかを。

「妃…って何？」

『つまり、王様のお嫁さんって事です』

今は一応婚約者という名目になってますけど。

「こんやく？」

ん…と首をかしげ、分からない単語に戸惑いを見せる。

悠里はまだ幼い。

そんなに教え込むのもどうかとも想う。

「あの人…コワイ…」

悠里は涙を流した。

その涙を拭う睡蓮。

「すいれん…」

抱きついた悠里を抱き締める睡蓮。

あの方が悠里の父・母を目の前で殺した事は知っている。

そして、脳裏にそれがよぎっているのも…

『…悠里様、私が傍におります』

「すいれん？」

涙を拭われてる間にも睡蓮は視線をあわせ、額をくつつけた。

『私では到底出来ませんが、お父様やお母様の代わりを勤めさせていただきます』

だから、怖いときは怖い、とおっしゃってください。

一概に泣いていいと睡蓮はいう。

『泣いてもいいですよ』

そしてそれで分かなければはっきりと言葉に出して呟く。

「……うわぁ… あん…」

泣きじやくりだした悠里を再び抱き締め、背をそつと撫でてやる。
まだまだ甘えたがりの子供を奪い、手に入れようとしている紅を許してやるわけには行かないが、だが、今はただ、泣かせてあげたかった。

わけもわからないまま連れてこられ、あの部屋で一人でいた悠里。
寂しくないように… ツライといえる相手がいるということだけ知っておいて欲しかったから。

翌日（後書き）

紅が出てこないけど、睡蓮と仲良くなった悠里。
少し気が許せる存在をつくってあげたかったです。
睡蓮は。きっと

強敵は姉！？（前書き）

悠里のお世話係の人が…実は…！？

強敵は姉！？

泣きじゃくつた悠里を抱え、部屋へ向かう睡蓮に使女が目を見開いた。

睡蓮様……

「いいのよ、悠里を寝かせたいの。お布団の用意をして頂戴」

抱えたまま睡蓮は廊下ですれ違ふ使女の一人にさういつと使女は駆け足でその場所に向かう。

「本当に馬鹿な弟でごめんなさいね、悠里」

申し訳なさに呟く睡蓮。

本当に私の弟は馬鹿だわ。

悠里を部屋に寝かせると掛け布団を掛け、使女の一人に悠里が起きたら呼んで欲しいと告げるとその足で紅の部屋へと向かった。

「くうくうれえなあくういいー！ー！」

ドアを蹴破つて入ってきたものすごい形相の女性は間違ひなくさつきまで悠里といた睡蓮だった。

「あね……うえ！？」

執務中だった紅は驚きを隠せない。

「あんたつて子はあ！！」

拳を振り上げ、紅めがけて振り下ろす。

「ぐふっ!!」

机に沈み込む紅に補佐役の者達が慌て出す。

こんな魔王の姿は見たことがない。

すぐにあのぐらいの攻撃を交わせないはずはないのに……

「あんな小さな子の両親目の前で殺して、あげく名前も名乗らなかつたってどういうこと！？しかも攫って来るなんてどういふ見！」

私にわかるように説明して！！

机にドンと座ってぶっ倒れた紅を助け起こした瞬間そういわれて、紅は殴った相手をにらみつけた。

だが、そんな睨みなど屁でもないと目を細められてしまった。

その瞳は反論なんて許さないというもの。

「……………そんな暇がなかったただけだ」

「へえ、食事と一緒にとらない、それってどういうこと？」

補佐官、あんたもあんたよ、あの子とは疎遠にするつもりなの？

どういう管理してるの、あんた。

睡蓮にまくし立てられ、たじたじの補佐官。

「姉上、とりあえず落ち着かれよ」

「落ち着いてるわよ！！」

猛一発ぶっ飛ばそうかしら？

拳を握り、紅に詰め寄る睡蓮に補佐官が待ったをかけた。

『お、落ち着いてくださいませ、魔王様も、睡蓮様も、ただいまお茶をお持ちしますから……』

どうか、どうか、お怒りをお鎮めに…

補佐官は必死だった。

二人を止めなければ魔王城が破壊されかねないと思ったからだ。

たじたじの補佐官の言葉に仕方ないといった表情の睡蓮。

それに汗を拭き、使女に茶の用意をするようにせかす補佐官だった。

一旦休憩を称し、茶を飲むためにテーブルに移った二人。

「で、どういうことかしら？」

「言葉どおりだ。」

「攫っておいて名前も言わずにほっぴり出した事が？」

「…仕方ないだろう…」

待ったが利かなかった。

「待ったが利かなかったじゃすまないでしょおに！！」

あの子、あんたの事怖いつていつてたわよ。

「……逢ったのか？」

「ええ、世話係よ。私ぐらいでしょ？」

あの子が脅えないように世話できるのは。

睡蓮も紅同様魔物。

でも人型を保っていられる魔物は魔王、5大将、睡蓮ぐらいなもの。
後の使女達は式であり、もとの形はない。

ので、睡蓮が自動的に彼女、悠里の教育係となる。

「……そうだったな」

紅はあまり関心のないような顔で紅茶を口に含む。

「マジでむかつくわね、我が弟ながら……」

「姉上がもつとまともに仕事をしてくだされば俺はこんな風に……」
仕事をしなくてもよいんだが？

一概にそういわれ、睡蓮は苦笑い。

だって、仕事は面倒だし、魔王という役職は男にしか受け継がれないのだから……

「私は魔女でいいわよ。王様なんてめんどくさい。」

「姉上がそうだから俺が魔王になっただんだが？」

「うっさい。とりあえず悠里ちゃんに行く所がないんだから私が面倒見るけど？」

食事ぐらいは共にしなさい。

話も出来ないんじゃないの？他の人に持つていかれても仕方ないわよ？

「……あれは我が物ぞ。」

「だから？」

怖い顔にしても実の姉では効力はないらしい。

「あの子は私が育てるわ。まだ4つでしょ？」

かわいいそうなもの。

「……明日婚礼を行う予定だが？」

「……ばっかじゃないの!？」

あまりの急さに睡蓮は呆れてものが言えないという態度を見せる。

まだ四つである。

婚礼とは魔の力を受け入れるための行為を行う事。
そんなの出来るわけがない。

こいつ本当に馬鹿ではなからうかと睡蓮は想った。
弟ながら育て方を間違えたのではないかと。

「とりあえずあんたは婚約者から嫌われてるの、分かる？」

「それがどうした。」

ここでは我が法律。

そうきつぱり言い切る弟に呆れながら睡蓮は言葉を続けた。

「あんたが今後もそういう態度で彼女に接するなら婚約破棄ぐらいは覚悟してちょうだい」

「なっ!？」

慌てた様子の紅に睡蓮はにやりと口元を緩ませた。

「だって、あの子はまだ4つ。それにあんたとあんまり面識もない、魔族でもないから魔界の規則も関係ない。なんなら私が引き取るわ。そしたら血縁もあるし、あんたとは結婚できない。文句ある？」

私に逆らえると想って？

「姉上でもあれを我から引き離すなら容赦はしない」

紅はそういうが、姉である睡蓮に勝てた事が今までないのも事実。

「どうぞ、戦争でも何でもしましょう。まとめて魔界の屑にしてあげるわ」

本気出してもよければどうぞ。

「……………」

紅は黙るしか方法がなかった。

強敵は姉！？（後書き）

魔王様タジタジです。

マジに怖いんでしょうね？
きっと。

睡蓮のお友達？（前書き）

魔王がつれてきた花嫁…悠里。

彼女の使女として仕えることになった睡蓮。

睡蓮と紅は実は姉弟！？

これから悠里はどうなっちゃうの？

睡蓮のお友達？

姉が本気で怒れば魔界全土が破壊されかねない。
それはどうしても避けなければならない。

まだ幼かった姉は五大将の一人に勝ってしまったことがある。
本気で勝負して勝ったので姉も満足だった。

だが、その五大将の一人は闇討ちを慣行。
といっても姉が返り討ちにして藻屑と化してしまったのは言つまで
もなく…

そついう実績を持っている姉に勝てるはずもない・

「……………改善策を探そう」

「…前向きに検討しなさいよ」

紅。

「…わかった。」

「あの子悲しませたら許さないんだから」

「…わかった」

魔王が恐れる存在の姉。

コンコン

執務室のドアがノックされ、『入れ』との紅の声に使女の一人が顔を
除かせた。

「失礼いたします。睡蓮様、悠里様がご起床なされました」

睡蓮様はいずこかとお尋ねになられております。
礼儀正しくそう呟く使女に睡蓮は腰をあげる。

「すぐに行くわ。悠里にお茶とあとお菓子を。」

あ、ジューズでいいわ。

「かしこまりました」

下がる使女を尻目に睡蓮は紅にもう一度視線を移す。

「とにかく、あの子を泣かせるようなことしないで頂戴。その時は弟だろうとなんだろうと容赦なく…」

親指で首元にすうっと線を引き、それが何を意味しているのかぐらい分かるだろうという仕草をした。

もちろん紅とてそれが何を意味するか分からないわけではない。

「わかっている。今のままでよいとは思っていない」

「なら結構」

あんたの味方ではないからね。今回は。

じゃあね〜。

と去っていく睡蓮を横目に補佐官は安堵のため息をこぼした。

『魔王様…』

「気にするな、いつもの姉のわがままだ」

だが、下手な式をつけるよりも悠里が姉に懷けばこんなに心強いことはない。

『睡蓮様を使女扱いなさるのですか？』

「いや、悠里付きの者という扱いにさせろ。姉上の怒りに触れるわけには行かないからな」

姉上の好きに今はさせておけ。

『ハア…』

補佐官は困り果てた様子だが、これは彼にとっては好都合の何者でもない。

身近に協力者がいれば好都合だ。

あんな衝撃的なことを見て驚かないはずはないが、確かに、姉の意見も一つある。

怖がらせておいて次の日にどんな顔をして逢えばいいのか分からなかったのも事実。

だが、逢わずにいられるわけではない。

それは4年も待った紅が一番良く分かっていることだからだ。

悠里の元を訪れた睡蓮はすぐに抱きつかれた。

一人で眠っていた部屋で目を覚ました悠里はまた涙を溢していたのだという。

『悠里様：御前を離れて申し訳ありませんでした』

心細かったでしょ？ごめんなさいね。

そう告げる睡蓮に悠里はぎゅっと抱きつくだけで何も言葉を発しない。

よほど怖かったと見える。

『悠里様：そんなに涙流されますと目がこぼれてしまいますよ。』

悠里の目の位置まで顔を近づけてそつとハンカチで涙を拭う。

ぐすつとする悠里に睡蓮は愛しさを感じずにはいられず、今度は睡蓮が背中を摩りながら悠里をあやす。

『大丈夫ですよ。魔王様にこちらで過ごす許可を頂きに行つてまいりました』

これからは一緒にいられます。

「…いつしょ？」

『はい。悠里様だけの使女でいられるように魔王様に取り計らってくれるそうです』

「ほんと！-！」

『はい。』

につこり笑う睡蓮に悠里もうれしそうに笑った。

「一緒なの？ホント？うれしい」

『私事です。魔王様は悠里様がそれで良いならよいとおっしゃってましたから』

睡蓮は傍にいてもよろしいですか？

「…（コクッ）」

『では今日からこちらに寝泊りさせていただきますね』

「うん。すいれん、一緒に寝よ」

『はい、そのように』

ぎゅって抱きついてきてうれしそうに笑みを浮かべる。

・こんなかわいい子を泣かしたら承知しないんだからね、紅。

睡蓮は心のうちで拳を握り締めていた。

「ねえ、すいれん…」

聞いていい？

お茶の時間という事で起きた悠里に睡蓮ははい？と首をかしげた。

『なんでしよう？』

「さっきの…人？」

ダレ？

『さっき…？』

誰だろうか？

睡蓮が首をかしげていると運んできたのは睡蓮の使い魔であるパーピーだった。

『この子ですか？』

「…うん、人じゃないよね？」

カイブツ？じゃ失礼か…

震える悠里に睡蓮はにこつと笑う。

『私の…そうですね、友達ですね。』

パーピーといいます。

「ともだち？」

『はい。ここ、今いる場所は魔王である紅さまの家なんですけどね、お城なんですよ。』

で、私もここに住まわせてもらってるんですけど、あまりに広過ぎるので使女というのがいます。私もそうですけどね。』

わかりますか？

一つ一つ丁寧に解説していく睡蓮に頭にはてなマークを浮かべた悠里は「なんとなく」とだけ呟いて苦笑いを浮かべた。

『この子は私と一緒にいたいから来ちゃったんです。』

もちろんちゃんと許可は頂いてますよ。

パーピー。

睡蓮に呼ばれ近づく。

観ると羽が生えていて上は女性の身体で下は動物の身体だった。

『パーピーは私が用事でいないときに悠里様が寂しくないようにこちらにちよくちよく顔を出させますから、何でも話し掛けてくださいね』

お友達になってあげてくださいね。

そういわれ、悠里はパーピーさん？と恐る恐る声をかけた。

『パーピーとお呼びくださいませ。』

「じゃ、パーピー、わたしと友達になってくれる？」

『私でよろしければ…』

「んつと…ケイゴいらない。」

しかし…

パーピーが困った様子で睡蓮を見やる。

だが睡蓮は苦笑いを浮かべ『悠里様の言うとおりに』とだけ呟いた。

『ではこちらこそ』

敬語もなしです。

「うん。お友達」

はい。

手を差し出した悠里の手を恐る恐るパーピーが触れる。

羽の感触が気に入ったのか悠里はにっこりと笑顔を向けた。

その笑顔こそ、睡蓮にとってはかけがえのないものだと思えた。

紅の事も少しずつ変化していつてくれたらいいな。

姉として、紅と悠里の事は心配でもある。

そして、ここで暮らしていく悠里が魔物を怖がらないで接してくれるように…

出来る限りのサポートはしていこうと想っている。

だからこそ、一番仲良しになりやすいパーピーをこうしてよこしたのだから。

「ねえ、すいれんの友達まだいるの？」

「ええ、いっぱいいますよ。」

でも恥ずかしがりやさんが多いので少しずつ逢いましょうね。

「恥ずかしい人多いの？」

パーピー？

「…そうですね。」

「?????」

首をかしげた悠里に二人は苦笑いを浮かべた。

睡蓮のお友達？（後書き）

ハーピーとはギリシャ神話のハーピーみたいな感じですよ。

上は人間の女で下が鷲のような感じ。

でも見た目怖いので大人の女ではなく10〜20代ぐらいの若い感じの大人と子供の境目ぐらいな感じの子を想像してくださいれば幸いです。

さあ、友達が出来ました。

これからどうなりますやら…

悠里の冒険（前書き）

お茶の時間に悠里の世界の食べ物のはじめると睡蓮やパーピーには馴染みがないらしく、興味津々。

悠里は自分でも教えられる事があるので大喜びした。

悠里の冒険

「さあ、お茶にしましょう」

悠里様：

睡蓮の言葉にパーピーが持ってきたジュースとお菓子を悠里の近くのテーブルに降ろす。

「ご飯：じゃないの？」

「ご飯の方がよろしければそうしますけど？」

お菓子は早すぎたかもしれない…

睡蓮が苦笑いを浮かべると悠里は笑う。

その笑顔はとても輝いていて…

「では、悠里様：ご飯にしましょうか？」

何がよろしいですか？

「……なに食べるの？」

幼心にここの食べ物は何かと言う興味があるらしい。

「悠里様はどういうモノを食べるのですか？」

睡蓮がそういうとぱんとかみるくという単語が出てきた。

だが、睡蓮達からすれば食事などあまり取らないし、どっいつのを人達が好んで食べるのか分からなかったから。

「…んと、えつと…」

こんな感じの…

そういつて一生懸命説明する悠里に睡蓮とパーピーは興味津々。

「ではそういう丸い形をした粉を練って焼く物なのね」

ふむふむ…

聞き入る二人に悠里はなんだか楽しそうだ。

「…そうね、とりあえず昼食までには間に合わせるわ」

朝はお菓子でがまんしてくれるかしら？

睡蓮の苦笑いに悠里は頷いた。

どうやら勉強するべき事が増えたらしい。

「お菓子を食べたあとはこの城の中を見て回りませんか？」

悠里様。

睡蓮の言葉にお茶を飲みながら頷く。

「ここは大きいですからね…」

興味があるものが見つかると言いのですけど…

「…おしろ？」

「はい、お城です。前にも説明しましたようにここは魔王である紅様の家なんです。

で、私たち使女というお手伝いさんがいると思ってください」
ここまででは分かりますか？

睡蓮の言葉に悠里はコクツと小さく頷いた。

「ここは悠里様のお部屋以外にも色々とあります、この部屋ばかりでは退屈でしょうから、

少し散歩がてら歩きに行きませんか？」

お城の散策ですね、いわゆる。

睡蓮の言葉に首をかしげながらもなんとなく散歩という言葉で頷いた。

悠里にはまだ分からない単語が多く、そのつど、睡蓮なり、パーピーなりに聞く。

二人は面倒がらずに答えてくれるので悠里はとても楽しかった。

お茶を片付けるのはパーピーの役目らしく、パーピーが部屋の外へ行くと睡蓮が紙に何かを書いていた。

じつとそれを横から見ていた悠里。

「これ、なあに？」

「ここが今居る場所です。つまり、地図ですね」

こんな感じですよ、このお城の中は…

そういつてスラスラと書き、睡蓮は説明をはじめた。

「こういう風なのがあると便利ですよ、今説明しましたとおり、

ここが今居る場所、
現在地って言います。」

「げんざいち……」

「そうです。xのマークを付けときますね。ここが今居る場所です。」

「……そういつてxのマークを右下の四角に書き込んだ。」

睡蓮が書いたのはこの城の地図。

そして、悠里があることに気づく。

斜線が引いてある場所があることに……

「ねえ、ここは？」

なあに？

「ここは紅様のお部屋です。」

立ち入ることはある程度のモノにしか許されていない場所です。

「たとえ悠里様でも入ってはいけませんよ」

だからこうして駄目だって書いてるんです。

そういう睡蓮に悠里は頷いた。

「……すいれんどこいったの？」

「睡蓮様はお仕事ですよ」

パーピーが戻ると同時に睡蓮を別の使女が呼びに来た。
どうやら仕事関係らしい。

悠里にはよく分からないが、忙しいのだそうだ。

「おしごと？」

「はい。ですので私が案内いたしますよ」

「……どこいくの？」

パーピーと手を繋ぎ、悠里は歩いていった。

部屋から出たことのない悠里はキョロキョロと辺りを見回してパーピーはそれに終始苦笑いを浮かべていた。

「ここ、どこかな？」

さつき睡蓮が書いていた紙を持ち、片手に鉛筆を持ちながら悠里が尋ねた。

「…こちらをまっすぐ来たのでこちらです」

「…ここは？」

正面に見える部屋はなんだろう？

と首をかしげる悠里。

「…こちらは紅様の側室の方のお部屋になります」

でも空き部屋ですが…

「そくしつ？」

なんでいないの？誰も…

悠里がその部屋のドアをあければ誰も居ないし、何もない。

「悠里様以外を迎えるつもりが紅様にはないとの事ですから」

それで空き室になっております。

「…？よくわかんない」

そくしつってなに？

「側室とは、悠里様以外にここに住む女性の事をいいます」

「…すいれんとか？」

パーピーもなの？

「私は睡蓮様に仕えていますので違います。睡蓮様も違います。」

「…じゃあどういうこと？」

「つまり、正室、この場合、悠里様のことですが、それ以外の妾という事になります」

「…めかけ？」

「あまり覚えのない方が良くかと思われます」

パーピーは話を逸らしたいらしい。

「…よくわかんない」

「まあ、お気になさらず…」

次に参りましょう。

手をひかれて次の場所へと歩き出した悠里達。

数分歩くと交差する場所に出てきた。

「ここはどこ？」

「こちらになります。ちょうど悠里様のお部屋と別の棟への別れ道になります」

紙を覗き込む悠里の上から指で順路をさし、今の場所を指差した。

「こっちはなあに？」

「こちらは城で働くモノ達の仕事場があります」

右は仕事場、左は後宮、北は謁見の間、南は城下町への扉。

「どちらにいかれますか？」

まだ外は駄目だけど、城の中は自由に行つていいといわれているとパーピーは言つた。

「…よくわかんない。」

「…では、後宮の書室に参りませんか？」

「しよしつ？」

悠里が首をかしげるとちょうどパーピーの後ろから男の声が聞こえた。

『書物が置いてある場所だ…』

「紅様!？」

パーピーはかしこまり、そのまま平伏した。

「…悠里、息災か…」

紅の言葉に悠里は首をかしげた。

「そくさい？」

「悠里様：お健やかに…、なんの不都合もなく…も難しいですか？」

「…わかんない」

悠里の言葉に紅はただ淡々と言葉を続けた。

『パーピー、姉上はしばらく戻らん。悠里の事はお前に任せる』

「…かしこまりました」

「…ねえ、パーピー？」

平伏しているパーピーの羽を引っ張り、悠里が首をかしげる。

『何かわからないのか？悠里』

紅がため息を一つ吐き、悠里へと向き直る。

「なんでパーピーがこんなかつこうするの？」

「悠里様…」

『…パーピーは睡蓮に属しているというのは判るな？』

「…？」

「悠里様、つまり私は紅様よりも位が下なのです。ですから目上の位の方にお目通りする時は平伏するというのが決まりです」

パーピーの説明に悠里は首をかしげ、不満そうな顔をした。

通常、めったに位が高い者が低いモノと会話をすることはないが、そうなった時は平伏するのがこの魔界の規定であり、そうするのが常である。

「…？よくわかんないけど、なんかやだ」

こういうのなんかやだ。

『……そうか。』

ただ一言そう呟く紅。

『パーピー、平伏はしなくてよい』

「しかし…」

『悠里の居る時だけでかまわん』

悠里は気に入らないらしいからな。

「…はあ…」

パーピーは渋々と立ち上がる。

『…これでよいか』

「…うん」

だが、悠里の表情は固い。

『…書室に行くならば明日にしろ』

今は入れないだろうからな…

紅の言葉に悠里は「どうして？」と呟いた。

『今、書室を整理させている。』

悠里の成長に合わせて書物を置くスペースを作る為だ。

紅はそう言つと、パーピーの横を通り、謁見の間へと足を運んだ。

「あのひと…なんでいたの？」

怖かったのだろう、ずっとパーピーの羽を掴んでいた。

「きつと悠里様にお逢いにいらしたのではないでしょうか？」

いらつしやらなかったたのでお帰りになる最中だったのかと。

パーピーがそう呟くと悠里は不思議そうに首をかしげた。

なぜ自分の下に来るのかと。

「悠里様は正室…つまりお妃さまですからね。お妃さまの横には王様が必要ですよね？」

王様とは紅様の事をいいますので、こちらにも来られる事があります」

「…むずかしいことわかんない」

「少しずつ覚えていけばいいのですよ」

今は焦らずに…

「さっきあの人がいつてたことは？」

そくさいとか…

「息災とは無事ですか？という意味です」

「無事？」

「ここは色々と私のようなモノ、いわゆる化け物がいますから」

「パーピーは化け物じゃないもん」

「悠里様…」

「…睡蓮いないって言ってたね…」

「左様ですね。」

「それもわかんない」

「左様ですとはそうですねという事です」

パーピーはゆつくりとそう告げた。

「…ことばがわかんないとこまるね」

「ですね、ではお部屋に戻りましょうか…」

お勉強しましょうね。

「…うん。」

やだけどがんばる。

「…私たちも少しずつ言葉を簡単にしていきますから」
「がんばりましょうね、一緒に。」

悠里の冒険（後書き）

紅と悠里がようやく会話しましたね。

紅も不器用だからあまり長くはしゃべらないですが、ちゃんと悠里の事を思っているんですよ。

これから二人がどうなるか…お楽しみに

外伝1：魔王の真の想い（前書き）

魔王である彼が悠里を想う気持ちです。

そして、悠里を攫ったのも彼なりの思考があるんです

外伝1：魔王の真の想い

転生しても尚、オレはお前を求め続けている…

記憶に残る…お前の笑顔…

そして、その魂の輝き…

それに惹かれ続けている…

死に際…

『生まれ変わったら…私を…見つけて…』

その言葉を頼りに生きてきた…

お前を再び、この手に抱きしめる事だけを夢見て…

そして、お前の魂の輝きを見つけた。

まだ幼いお前は私を知らないだろうな。

だが、オレは知ってる。

お前という…存在を…

生まれたばかりのお前をこの目で見て、

そしてつけられた名前が同じなのも運命なのかと思った。

「悠里…」

小さく呟いてみればやはり胸は高鳴り、血が高ぶる。

お前を早くこの手に抱き、我が元に戻って来て欲しい。

そう、そして、待ちきれずお前を連れてきた。

私の城に。

なのに…お前が私を見る瞳は冷たい。

家族というものを殺したからだというのは分かっている。
だが、どうすればよかった？

お前が泣く姿など見たくはない。

それだけは真実だ。

だが、してしまった以上お前に何を言っても無駄であろう？

だが、後悔などしていないぞ。

お前は我が花嫁…

生まれる前から決まっていたのだからな。

愛している…

400年生きてきて、恋をしたのはお前だけだ。

外見ではない、魂に惚れたのだ。

だから、どんな外見でもかまわない。

もちろん、無理やりに惚れさせる事など可能だ。

魔界ではその名…真名を呼べばそのモノを束縛する事は可能で、
のままに出来る。。

それをしないのはアイツの心が今はオレの所にないから…

だから…あいつの気持ちはこちらに来た時でもいいと思っている。

その時はどんな手を使ってもあいつを我がモノにする。

こんな事を姉に言えば怒鳴られるだろう事は予想がつくし、殺され
かねない。

魔王よりも鋭い力を持つ姉…自分よりよっぽど魔王にふさわしいと
思うが、

姉いわく、『面倒』だという事でオレが魔王になったわけだが…
そんな事、今ではどうでもいい事で、アイツに関しては、

魔界の王としてのオレよりもただ一人の男としてのオレが
アイツを…悠里を求めている。

それだけは何人たりとも変える事のできない事実。

愛してる…

もう一度お前の笑顔を見れるなら…

どんな事もしてやろう。

「…悠里…」

誰もいない執務室でただ瞳を閉じて天井を見る。
それが最近の日課になってしまっている。

外伝1：魔王の真の想い（後書き）

悠里を想っている魔王。

その気持ちの断片を書いてみました。

睡蓮の決意（前書き）

悠里のお世話役から悠里が泣いている事を聞いた睡蓮。
近くに居たパーピーも泣いてる理由を知っていた。
だがそれだけに何もしてあげられず…

睡蓮の決意

『睡蓮様：あの、折り入ってお話が…』

睡蓮は仕事から戻った後、悠里の元へは向かわずに執務室へと戻った。

もちろん、今回出かけた事を報告する為だ。

紅：魔王だけになら口頭でもいいのだが、他の家臣への報告も必要とあらば仕方がない。

その睡蓮の執務室に入ってきたのはパーピーと同じく悠里のお世話をする睡蓮の使い魔。

「どうした？」

『：夜な夜な：悠里様はたびたびお目覚めになられ、泣いておられる様子で…』

その使い魔の話によると度々悠里は目を夜中に覚まし、泣いているという。

パーピーすらどうして泣いているのかと聞いても話してくれず、ただ泣くのだという。

で睡蓮が帰ってきたらこの状況をどうしたらいいのか聞いて欲しいとパーピーから頼まれたのだと。

「：泣いてるの？悠里が？」

『はい。しかも酷く強張った表情を一瞬だけ浮かべられて…』

私達に気づかれないようにすぐに笑われますが…

その笑顔が少しムリやりのような気がしたので…

この使い魔が気づいているという事はパーピーもその事実気づいているだろう。

だが、悠里の傍を離れるわけにはいかない。

でこの子に頼んだというのだとすぐに察しはついた。

「判った。悪いんだけど、これ紅の秘書に渡して、それからアスタロトにも伝言を」

『かしこまりました』

睡蓮は今まで着ていた甲冑を脱ぎ、いつものような使女姿に変わるとすぐに悠里の元へと歩き出す。

どうして夜泣くのかはわからないが、それを聞いたところでたぶん答えないだろう。

ならば、その場で聞けばよい。

そう思ったからだ。

コンコンコン

「どおぞ」

『失礼します』

「あ、スイレン」

笑顔の悠里が睡蓮に気づいて笑顔を浮かべる。

『ただいま戻りました。悠里様』

「おかえり。スイレン」

その近くには当然のようにパーピーが居た。

「今ね、パーピーにお話読んでもらってたの」
うれしそうな悠里の顔に睡蓮も思わず笑みを浮かべる。

そして、同時に心配になった。

どうして悠里は泣くのだろうか？と。

紅がしたことは消せない。

たとえ魔法を使っても。

記憶消去はもちろんできる。

だがあえてしないのはそれを含めて悠里に紅を好きになってもらいたいから。

今はムリでもゆっくり事が進めばいい。

そう思っているから。

だが、あまり長く待てないのも事実。

悠里には…というか人間には寿命が当然のことながらある。

睡蓮達もないわけではないが、事故、もしくは暗殺でもされない限り数千年は軽く生きる。

だから魔界の者が人間を手に入れるためにはある儀式を行う必要がある。

それは半魂はんこんの儀と呼ばれ、文字通り魔物の魂の半分とその人の魂の半分を分け合う儀式。

行わなければ悠里は時間が経てば死んでしまうのも問題の一つ。

でもまだ悠里は4つ。
暗殺でもされない限り大丈夫。
そつ、暗殺でもされない限り…

夜、皆が寝静まる頃、悠里のすすり泣く声が聞こえる。

「…つく、おかあさん…おとあさん…」
聞こえてきた言葉に睡蓮は部屋に入るのを躊躇った。

父親や母親を殺された瞬間を夢見てしまっているのだ。

辛い記憶…

それを作ったのは自分の弟。
判っているからこそ躊躇う。
自分にその資格があるのか…と。

「…つく…ひつく…」

鳴き声が聞こえる…

これをどうにかする事は出来ないの？

「おかあさん…おとあさん」

泣きじゃくる悠里をパーピーもあやす事しか出来ないだろう。

『ごめんね…ごめんなさいね、悠里…』

睡蓮はただ、ドアの前で立ち尽くし、ドアに手を当てて誤るしかなかった。

どんなに寂しかっただろう…

どんなに辛かっただろう…

睡蓮も判つてはいた。

悠里が幼いということ。

でも睡蓮が考えているよりも更に悠里は苦しんでいたのだ。魔界に急に連れてこられて、状況を理解しようと一生懸命だったのだ。

判つてた…いや、わかっていたつもりだったのだ。

だが、あまりにも悠里は幼い。

幼すぎる事を失念していた事に怒りにも似た感情を抱いた。

『時期尚早だったのかもしれないわね…』

ドアを開けると困ったようにパーピーが睡蓮を見上げる。

『パーピー、私が変わります。あなたは戻っていいわ』

ご苦労様。

そう睡蓮にいわれ、パーピーは睡蓮の陰へと戻っていく。

『悠里…ごめんなさいね…』

本当に…ごめんなさい。

謝つてすむ問題じゃないのは判つてるのよ。
でも、でも……、言葉が出てこない…

「おかあさあ…ん、おとあさあ…ん…」
泣き続ける悠里にパーピーも困り果てているのがわかる。

『どうしたものかしらね?』

人間界に行っていた睡蓮はもちろん仕事だが、悠里の教育係として
少しでも役立てる物がないかと
探す目的もあった。

『あ、…そういえば…』

歌詞までは覚えてないが…音だけは覚えてきた。

『パーピー』

呼べばパーピーは悠里の影から出てきて睡蓮の傍に寄る。

『私のハープ持ってきてもらえるかしら?』

「…はい。」

ドアをあけて悠里の傍から離れたパーピーが持ってきたハープ。
そのハープによって奏でられる音が部屋を満たす。

ゆったりとしたその音色に悠里の顔がだんだんと安らかに変わって
いく。

鳴き声は小さくなり、変わりにかわいい寝息が聞こえる頃、睡蓮は
ハープを一度止めた。

『本当にごめんなさいね…悠里』

そつと悠里の頬に掛かった髪を横へ長し、ハープを持って立ち上がった。

『パーピー、後は頼みましたよ』

部屋を出て行く際、そう小さく睡蓮は告げた。

パーピーはそれを見て頷き、悠里の傍へと戻っていった。

睡蓮の決意（後書き）

睡蓮の決意ですね。

これから展開があります

計画中（前書き）

泣いてる悠里をどうにかしようと思蓮が動き始めます。
そして、紅の気持ちも…

計画中

睡蓮が向かった先は紅の私室、つまり後宮で使われている彼の部屋だった。

「邪魔するわよ」

ノックもしないで入ってきた姉に紅自身呆れそうになるが、こんな時間に尋ねてくる理由を紅は秘書からもらった報告で察しをつけていた。

「何か？姉上…」

「紅…悠里の件だけ…」

「報告はすでに受けた。それでかまわん」

「違うのよ。」

「…違う？」

睡蓮のいつもと違った様子に紅も不信な眼差しを送る。

いつもの睡蓮ならばこんな言いよんだ言い方はしない。

もつとはつきり物事をしゃべる者なはずだ…

それとも悠里に何かあったのか？

思考をめぐらせつつ、睡蓮の言葉を待つ紅。

「悠里が…泣いてるの」

「…泣いている？」

「…ええ、私達に気づかれないようにしてるつもりらしいのよ、悠里はね。でも、私達は人とは違う…」

睡蓮の言葉にやはり不信が募る。

姉は何を言いたいのかが紅には理解できなかった。

「姉上、とりあえずこちらへ…」

長くなりそうだ…

そう思い使い魔に茶を持ってくるように告げると寝ていたベッドか

ら出て、近くのソファに座る。

その正面に促された睡蓮も座り、ゆっくりと語り始めた。

悠里の泣く理由…そして、その夢見ている内容…

それが紅自身を苦しめて、どうしようもないのはわかっていた。

でも言わずには居られない。

そして今、半魂を今行えば、確実に悠里の魂は拒絶をするだろうと睡蓮は告げた。

紅はため息を一つ吐き、天井に顔を向けながら目を閉じた。

これからの事を考えているのだろう、睡蓮にも答えが見つからなかった。

「…これからどうするの？」

「…どうにもならない事もある。」

「紅？」

「…あれが泣いている理由はわかった。だが、過去は取り戻せないのだろう？」

昔あなたが言っていたではないか、過去の過ちは繰り返さねばよいと」

違ったか？私の記憶違いか？

「…紅？」

何を言ってるの？

「あの娘を妃にする気持ちに偽りはない。たとえ、あれが別の魂であつたとしてもだ。」

確かにユーリの魂である事に間違いはないが…だが、あれは幼すぎる。そうだろう？」

「ええ。確かに。」

「ならば、大人になるまで待てばよい。最も、人と魔物は違うといふから魔物になってもらわなければならない。だが、今は決断の時じゃない、そうじゃないのか？」

「紅…あなた…」

紅が悠里が幼いこと、そして自分がしたことの責任を感じているという事に驚きを隠せない睡蓮。

睡蓮が知っている紅はとにかく我侭でただっこで、どうしようもないほどの自己中だった。

だが、どうしてこんなに考え方が変わってしまったのか？不思議だった。

「姉上、アスタロトに連絡は？」

「…ええ、帰ってきてすぐにしたけど？」

「ならば、上位魔物だけでも逢わせておくか。」

「紅？」

貴方…何を言ってるの？

「…身内…ではないが、あいつらにも妃の顔を覚えてもらわなくては困る。」

それに、悠里の気晴らしにもなるう。

そうは思わないか？姉上…

悠里を氣遣う紅の態度はユーリの時には見せなかった優しい態度だ。人を思いやり、その人の思いに答えたい、どうにかしたい。

そんな思いを悠里は紅にさせている。

そして、悠里という一人の少女によってここまで変わる弟に睡蓮は戸惑いを隠せなかった。

「姉上、その時に正式に我が姉だと言う事、王位第二継承権を持つ事を告げるがよいか？」

「…仕方ないわね。使女つてのも結構楽しかったんだけど」
こうなったら仕方ないわね。

「身内になれるんだものね、悠里が警戒しちゃうと困るけど…」

そのうちばらさなきゃいけないことだものね。

「ではアスタロトの了解を得次第すぐね」

「…悠里の気晴らしになればよいがな」

「…そうね」

お城だけじゃ息が詰まるものね。

少しの気分転換、そして、魔界を案内する名目とそしてお披露目。

悠里…貴方の居場所がここだって事、そして怖い夢を見なくてもいいように

私と紅がしてあげられる事は限られてるけど…

でも精一杯あなたを助きたい…

まだ幼い妃…悠里。

すべてはこれから動き出すのだから…

計画中（後書き）

二人して気分転換やらなんやら言ってますが、
どうなりますやら…

気晴らし？（前書き）

パーピーに言われ、驚きつつもアスタロトと逢う事になった悠里。
彼女には休息が必要で・・・

気晴らし？

「おでかけ？」

『左様です』

朝食を食べ終えた悠里の元に来たパーピーが言った。

『今日はアスタロト様のお屋敷にお呼ばれしているのでいつもとは違う服を着ていただきます』

そう言っつていつもとは違う少しレースのついたかわいらしい服装を見せられた。

アスタロト？

…お屋敷…？

お呼ばれ？

判らない単語だらけだったが、なんとなくパーピーの様子から何処かへ出かけるのだと悠里なりに考えたのだ。

「えつと、アス…？」

『アスタロト様です』

「アスタロトサマってだれ？」

『アスタロト様というのは魔王様、つまり紅様の直属の將軍様です。魔王様にはアスタロト様以外にも4人將軍という地位を持っている方がいます…』

パーピーが次々に話してくれるが悠里には到底理解できない事ばかり。

その為、首をかしげて考えてみるものの、どうしても判らないらしく、眉間に皺を寄せてしまう。

「わかんない…」

考えて出た答えがそれだった。

『ではその方に逢う為にその方のお屋敷、つまり住んでらっしゃる所まで行くのですよ。』

ここまではお分かりになりますか？

パーピーの言葉に悠里は頷いた。

出かける…この城の外だと言う事に悠里はわくわくしていたのだ。

『本当は悠里様は紅様の妃様なので相手様にこちらにきていただくのが恒例ですが、

紅様が悠里様もこの城内だけでは窮屈だろうとご配慮してくださったのですよ』

「…遊びに行くの？」

紅…という言葉に悠里の顔が少し強張る。

『いいえ、執務です。えっと…気晴らし…、そう、気分転換とあと…』

一生懸命パーピーは悠里のわかりやすいように言葉を選んで説明してくれる。

その必死さに悠里は申し訳なさそうに肩を竦めた。

『パーピー、悠里の支度は出来た？』

「あ、スイレン…」

部屋のドアをあけて入ってきたのは睡蓮だった。

いつもの使女の衣装とは違い、見たことのない服を着ていたので悠里は首をかしげる。

『睡蓮様…』

『悠里、やっぱり似合うわね、その洋服、どうかしら？私が探してきたのだけど…』

気に入ってくれた？

その言葉に悠里は笑顔で頷いた。

「うん。ありがとね、スイレン」

『今日は馬車で行くからパーピーは戻りなさい。』

『かしこまりました。』

あまり悠里が起きている時に影に入る事をしないパーピーだが、こ
うしないと今日はいけないのだと睡蓮は悠里に告げた。

『今日お逢いする方、アスタロト様は高貴、つまり紅様には及ばな
いまでも地位があるお方、使い魔を連れて行くというのは失礼にあ
たります。』

だからご勘弁くださいね、悠里様…

「…スイレンは？」

『もちろん、一緒に参ります…一緒に行きますよ。本日はアスタロ
ト様のお招きなのです』

私も同席してよいと言われました。

「…怖い人？」

「…悠里様？」

紅よりは下だけど男の人というのを紅以外知らない悠里は身体が強
張っている。

緊張しているようだ。

『アスタロト様はお優しい方です。それに礼儀をご存知の方、大丈
夫ですよ。』

さあ、参りましょうか、悠里様

手を差し出されて、悠里はにっこりと微笑んで睡蓮の手を取った。

馬車には先客が居て、それが紅だった。

『遅い…』

ため息を一つついてその反対側に座るとドアが閉められる。

『…本日はアスタロト様のお茶会なのです。たまには紅様ともお逢
いになりたいと言う事で一緒に行くことになりました』

「…こんにちは」

『ああ、息災か？』

「…元気…です」

息災…そう言われ、悠里は先日、パーピーや睡蓮に教わった言葉だ
と思い出し、ようやく言葉に出来た。

『そうか、何よりだ』

紅の一言に悠里は身体を強張らせてしまう。

「……………」

『……………』

黙りこくる紅と悠里。

“ 少しずつ溝を埋めていかなくはならないのにどうにかならんのか！ ”

と睡蓮は思ったが、ここで問題を起こすわけにはいかない。

ここは自分が何とかするしかないと思い、睡蓮は拳を握り締めた。

『そういえば、悠里様、バラはお好きですか？』

「バラ？」

『はい。アスタロト様のご趣味で庭園にバラが一面咲いているそうです』

今頃が一番綺麗だとか…

「お花は好きだよ。」

『見せていただきましょうか？』

「うん！！」

うれしそうな笑みを浮かべる悠里に視線をやり、チラッと紅を見ればその笑顔を見て少し頬をほころばせていた。

『紅様のお城にも庭園があるのはご存知ですか？』

「…知らない」

『…では今度紅様にお問い合わせは？』

今お願いしてみてもいいのではないですか？

ねえ、紅様…

睡蓮の合図に紅はため息を一つ吐き、『いつでも見に来い』と一言呟いた。

「パーピーも一緒…ダメ？」

『かまわん』

『よかったですね。悠里様』

「…うん!!」

アスタロトの庭園も見事なのは知ってるが、城にある紅自らが世話をしている庭園も見事なのを睡蓮は知ってる。

実は魔王をやつてるときよりも庭をいじっているときのほうが幸せそうだと言つのは内緒だが。

馬車が止まったのは一軒の屋敷…とはいえないほど立派な城の前。

『…悠里様、お手を…』

降りる時に補助したのは睡蓮。

紅も続いて降り、馬車はその場から一瞬にして消えた。

それにびっくりして目を見開く悠里に対し、二人は何事もなかったかのように歩き出す。

「ねえ。スイレン…」

『はい?』

「さっきの馬車は?」

どうしちゃったの?

『私達が帰るときにはまた出てきますよ。』

それまで置いておくわけにはいきませんから、移動したんです。

そついうと睡蓮は悠里を連れて紅の後を追う。

玄関ではたくさん使女達が紅達を歓迎してくれた。

ようこそいらっしやいました

どうぞ、こちらでございます

レッドカーペットの上を案内されてついた先は大きなダイニングルーム。

どうぞこちらでお寛ぎくださいませ。

使女の一人がお茶をテーブルに乗せると一礼して去っていく。

「……」

ぎゅっと睡蓮の洋服のすそを握り締める悠里に睡蓮は優しく頭を数回叩いた。

『大丈夫ですよ。もうすぐアスタロト様がおいになるので下がっただけです』

「……うん。」

城から一步も出たことのない悠里には少し刺激が強かったのかもしれない。

馬車の中も初めてで身体が少し強張っている。

疲れてしまったのかもしれない……

それが少し心配だった。

『悠里……』

様……

睡蓮が呼びかけようとしたと同時に紅が『悠里……』と呼んだ。

悠里はびっくりしたような顔をして「はい？」と答えた。

『馬車は初めてか？』

「……見たことはあるけど乗ったのははじめて」

『疲れたか？』

「……わからない」

『では言い方を変える。落ち着かぬか？』

「……うん」

『それは揺れたからか？』

「…うん」

『そなたの世界に馬車はないのか？』

「…むかしはあったみたいだけど…みたことない」

『ではなぜ見たことはあると先ほど言った？』

「絵本で見たことあるから」

『…書物か…なるほど。帰りも乗ることになるが…』

「…あんまり乗りたくない」

『…そうか。でも今回は我慢しろ。次からは考える』

それでよいか？

紅の言葉に悠里は小さく頷くしかなかった。

だが、横で聞いていた睡蓮はうれしそうに笑っていた。

二人がようやくちゃんとした会話をしたのだ。

これがうれしくないわけがない。

『悠里様、紅様と一緒に庭園に行ってきたらいかがですか？』

「…え」

『大丈夫ですよ。アスタロト様が来たら庭園に共に参りますから』

「…でも」

『何かあったらパーピーを飛ばします。だから大丈夫ですよ』

「……」

『睡蓮、そなたが行けばよい』

困っている悠里に紅が呟く。

だが、睡蓮はこのときを逃さない。

『お言葉ですが、紅様は悠里様との時間を持たなすぎです。』

それに私では品種などは判りかねますので』

“あなたががんばらないでどうするの！！”

睡蓮の無言の圧力の前に屈するしかない紅はソファから立ち上がり悠里に

『行くか？』と促した。

一応の礼はわきまえているらしい。

『…行つてらっしゃいませ。』

怖かったらパーピーをおよびください。

“少しでも歩み寄つてほしい。”

“紅を見てあげてほしい。”

“好き勝手な理由だけど、少しでも悠里に紅を見てほしい。”

そんな姉心とお側役として…

そしてアスタロトが来たら自分の正体がばれる。

それを少しでも悠里が受け入れやすいようにしてやりたいという思いやりだった。

「…いつてくるね」

『はい。行つてらっしゃいませ』

二人がぎこちなくではあるが部屋を出た瞬間、睡蓮はどかっと座り直した。

出されたお茶を一気に飲み干し、陰に潜むパーピーを呼ぶ。

『睡蓮様…お疲れ様です』

「少しね。でも紅が少しは歩み寄ろうとしたのは大きい進歩だと思うの」

『…気配を探っておきますか？』

「そうね、お願い。一応黒耀が紅に憑いてるから大丈夫だと思うけど」

『…アスタロト様がおいでになります』

「じゃ、よろしくね、パーピー」

影に消えていく配下に睡蓮は小さく呟いた。

入ってきたアスタロトはそこに居るはずの魔王が居ないのできょとんとしていた。

「お久しぶりです、アスタロト公爵。」

『お久しぶりです。睡蓮皇妃』

アスタロトと呼ばれた人物は物静かな印象を与える男だ。

髪はどつちかというセミロングで色は黒。

龍騎士の将軍という地位にあるため、龍の紋章のある軍服（これが正装）を纏っている。

第一印象で彼が悪魔に見えると聞かれれば「いいえ」と皆が答えるだろう。

だが、彼は第一の腹心であり、時にその物静かな仮面が冷徹に変わる。

それがどれほど恐ろしいかは彼が魔王の片腕と呼ばれる由縁である。

『魔王様はどちらに？』

「それがね、婚約者であり、妃である人と庭園にいるの」

苦笑しつつそう告げるとアスタロトは納得が行ったのか頷いてみせる。

『ではその婚約者様にもお逢いできるのですね』

「ええ、紅からこちらの庭園なら妃も気に入るのではないかっていうモノだから。」

無理を言ってごめんなさいね」

『いいえ、こちらこそ、わざわざ起こし頂き恐縮です』

「それで、庭園に行くついでにあの件だけ…」

庭園までの道のりを歩きながらアスタロトに本題を持ち出す。

『ええ、あの件はこちらでも調査しました。近いうちに戦になるで

しょうね』

貴方の見立てどおりに。

「そう… やっぱり半魂をしないと駄目かしらね」

『それが一番の方法だと思いますが…さすがに幼いのでは？』

「そうなのよ… それだけはどうにも…ね。」

すぐに死んでしまったらそれこそ困るもの。

睡蓮が首を捻るとアスタロトはにっこりと笑って窓枠に近づく。

『あの方が… お妃さまですか？』

庭園が見える窓枠に近づく睡蓮。

紅が何かを説明し、悠里がぎこちなく頷きつつも何か会話をしているのを見て、笑みを浮かべる。

「… 弟のあんな楽しそうな顔を見れるなら… 戦ぐらいいいかもしれないわね」

『… 皇紀…』

「アスタロト… あの件は他の將軍達にも伝えて。魔王には私から説明しておくわ。」

『御意』

一礼した後、アスタロトと共に庭園に続くアーチをくぐる。

「あ、スイレン」

見て見て。

そう言って笑顔を浮かべて一つの花を指差す悠里。

それは魔界に多く咲くバラの一つ。

『悠里の世界にはないらしい。』

紅の言葉に睡蓮は『そうなのですか？』と首をかしげる。

「あおいバラはみたことないの」

はじめてみた。

綺麗だね。

笑顔でそう言った悠里に睡蓮もつられて笑顔を浮かべる。

『左様ですね… あ、悠里様、こちらがアスタロト様、こちらのお城の持ち主でいらっしやいます』

そういつて紹介された青年といえるほどの男性に悠里は頭を下げた。
「はじめまして、おじゃましてます」

『アスタロトと申します。悠里様、本日はこのように足を運んでいただき、恐縮…』

アスタロトの長々の口上を紅は一括。

『挨拶は良い。悠里、我が妃を紹介しに来ただけだ』
そして、それも体面。

『悠里の気分転換もかねているからな。』

ただそれだけだ。

そついうと紅は睡蓮へと視線を投げかける。

『そうですね。アスタロト様、悠里様の気分を和らげる為ですもの。』

『……？』

首をかしげる悠里にアスタロトと睡蓮はくすつと笑みを浮かべた。

気晴らし？（後書き）

どうなるんでしょうね？

結局アスタロトは何を考えてるんでしょう？

戦？

何の？誰と？謎は深まるばかりだと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6156c/>

魔王の花嫁

2010年10月11日19時10分発行